

浜街道で脚力鍛え

渡辺一成選手(28)

—自転車競技

舗装路が田んぼの中を真っすぐ延び、東に太平洋が広がる。途中に東京電力福島第一原発がある。自転車競技の渡辺一成選手(28)は高校時代、この総延長55キロの通称「浜街道」で脚力を鍛えた。実家は福島県双葉町内で原発から3・5キロ。発電所は故郷の風景に溶け込んでいた。

被災地を
背負って



④

「双葉魂」忘れず

なり勝利。ぐんぐん成績を上げた。

五輪の自転車競技と競輪は別物だ。競輪は勝てば賞金があり、負ければ「銭返せ」とやじられる。一方、競技は、打ち込めば収入は失うが、負けても拍手を受ける。息子は北京五輪にも出た。競技に思い入れがある」と父は見る。北京ではトラック3周のタイムを競う3人1組のチームプリントで6位だった。両親や姉一家が双葉町で暮ら

していた。競輪と競技の両方で成績を残し、結婚もして、実家のそばに新居を建てる土地を買っていた。だが、順調な歩みは突然、暗転する。

東京都内で合宿を終えた直後に震災が発生。深夜、父から無事の知らせがあったが、実家は全壊し、全員、着の身着のまま避難所へ転がり込んでいた。

翌日、練習拠点の静岡県伊豆市の借家に戻り、ほうぜんとテレビ画面を見つめていると知人からメールが来た。「原発がやばいぞ」。水素爆発だった。避難を勧めたが、ガソリン不足で

すぐには動けない。両親らが神奈川県を頼って上京するまでに数日かかった。

それから間もない昨年3月下旬、オランダでの世界選手権に出場した。だが、宿舎でも眠れない。「異様な精神状態で、どんなレースだったか覚えていません」。結果は散々な成績だった。「なぜこんな思いをして走るのか」と自問した。

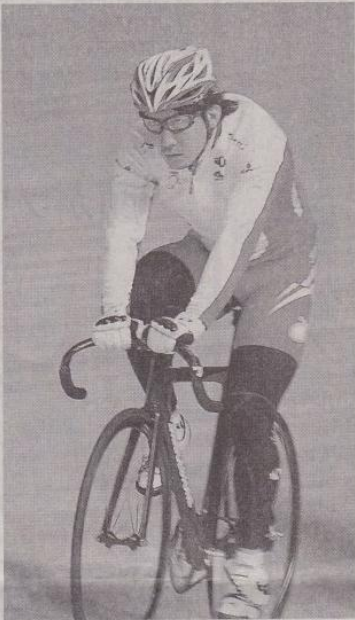
唯一の救いは被災した友からのメールやブログへの書き込みだった。「こっちは心配すんなー 一成は一成のことができることを精いっぱい頑張ってるよ お前に負けてらんねーしな」

放射線量の高い双葉町には戻れないかもしれない。それでも多数の励ましで2度目の五輪切符を手にした。

埼玉県加須市に集団移転する町民から届いた日の丸の寄せ書きに、こうある。「双葉魂を見せてくれ!」。旗はもちろん旅行カバンに詰めるつもりだ。

【川崎桂吾、井上英介】

—つづく



今年3月11日、黙とうをささげた後、練習に打ち込む渡辺一成選手
—静岡県伊豆市の自転車競技場・伊豆ペドロームで川崎撮影